

愛媛県教育研究大会の研究推進について

教育研究局研究部

I 大会主題

『子どもが変わる教育の推進』

～主体的・対話的で深い学びに向かう授業の創造～

II 主題設定の理由

愛媛県教育研究協議会は、結成当初から時の教育課題の解決に向けて真摯に取り組み、愛媛県教育研究大会において、その取組の成果を共有してきた。平成14年度（第7期）以降は、「生きる力を育む教育の創造」を大会主題とし、3年サイクルでの実践研究を積み重ねてきたが、以下の課題への対応が迫られている。

1 社会からの要請課題

現在、情報化やグローバル化、技術革新などの大きな社会変革が急速に進展しており、学校においては、子ども一人一人が未来を切り拓いていくために必要な資質・能力を追究しながら社会と共有・連携して、その育成を図ることが求められる。

2 学習指導要領からの要請課題

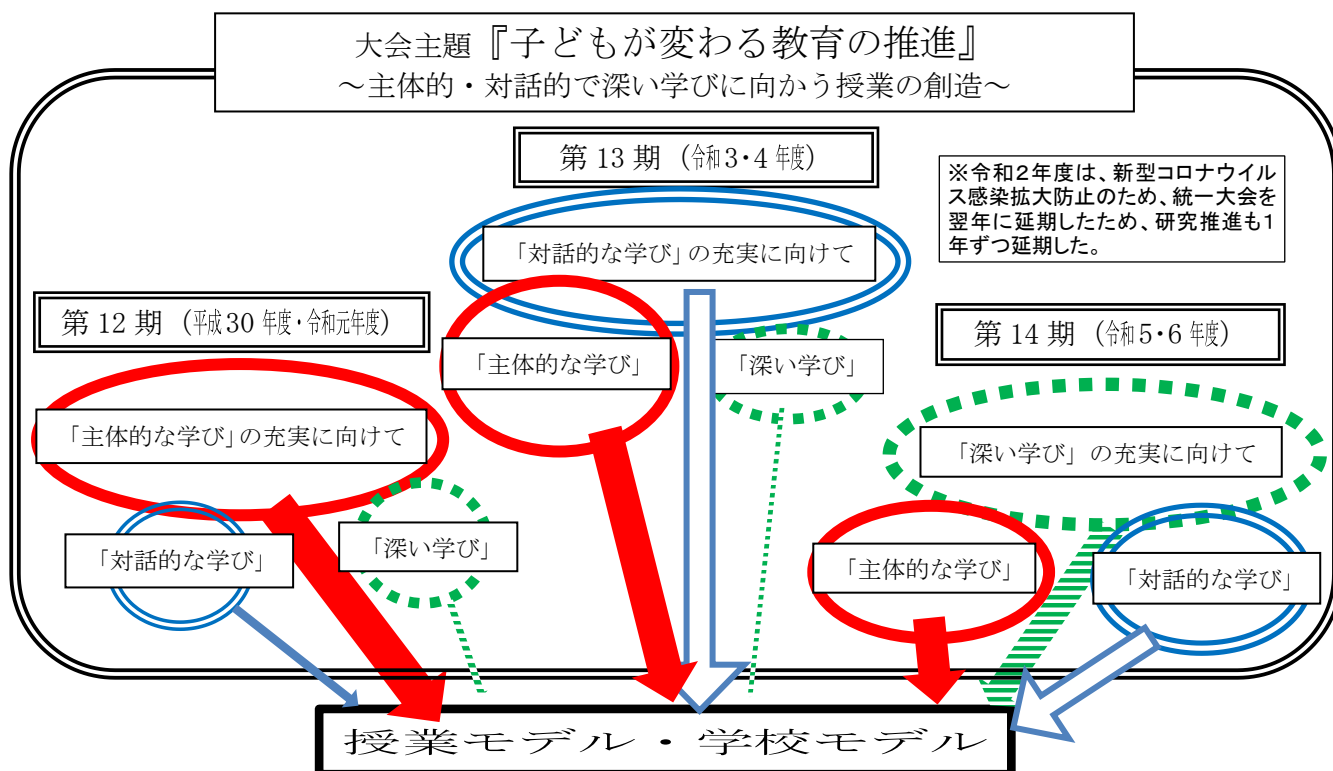
学習指導要領で示された「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を育成するために、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められる。

3 教職員の実態からの要請課題

現在、少子化による学校数・教職員数の減少及び大量退職と定年延長、若者の教職離れなどにより、教職員の年齢構成が大きく変化しはじめており、本県が培ってきた「同僚性を基にした良き教師文化」の確実な継承が求められる。

愛教研では、このような要請課題を踏まえ、研究主題を「子どもが変わる教育の推進」とし、学習指導要領の核とも言える「主体的・対話的で深い学び」に視点を当て、3期6か年を掛けて、学習過程の質的な改善を図るための研究実践を積み重ね、愛教研が目指してきた子どもが変わる授業の在り方や学校の在り方を探る。

III 研究推進の概要 ー2年サイクル6年スパンの研究のイメージー



Ⅳ 第13期研究の成果と課題

1 研究指定校の成果と課題

第13期の2年間（令和3年度～4年度）の研究指定校であった新居浜市立金子小学校と南中学校は、「主体的・対話的で深い学び」の中でも、主に「対話的な学び」に焦点を当てて実践的な研究を推進した。両校の研究の成果と課題について、それらの一部を次に示す。

（○…成果、△…課題）

- 今回の、「対話的な学び」に重点を置いた取組は小中ともにしっかり研究されており、特に、研究主題に迫るための授業モデルを中核に据えた実践は大変参考になった。
- 抽象的な対話を具体化する教師の働き掛けや思考の可視化をすると、対話は活性化した。なかでも教師の話合いへの参加は有効であった。
- 全教職員の意識統一を図り、児童生徒一人一人を生かす指導に努めることができた。言語技術能力の向上を図る取組や支持的風土づくりを目指す取組は対話的な学びを充実させるのに効果的であった。
- △ 今後も中学校区内の小・中学校が連携を図り、系統性のある指導に努めたい。

なお、詳細は「第49回愛媛県教育研究大会（発表大会）研究集録」を参照されたい。

2 「主体的な学び」の評価と対話を促す教師の支援に関する課題

令和元年に文部科学省と国立教育政策研究所教育課程センターから公表された「学習評価の在り方ハンドブック」に、「主体的に学習に取り組む態度」について「①粘り強い取組を行おうとする側面」と「②自らの学習を調整しようとする側面」の二つの側面から評価することが示されている。特に、後者の「②自らの学習を調整しようとする側面」については、次のような具体的な工夫の重要性が示されている。

- ・ 児童生徒が自らの理解の状況を振り返ることができるような発問の工夫
- ・ 自らの考えを記述したり話し合ったりする場面の設定
- ・ 他者との協働を通じて自らの考えを相対化する場面の設定

これらの工夫は、本手引の5～6頁の「主体的な学び」に係る「授業改善の視点・具体的な方策」カードのうち、「D 粘り強い取組」や「E 振り返って自覚」の具体的な方策として位置付けることも可能であり、引き続き検証していく。また、第13期の実践を通じて、対話の質をどう高めていくかという新たな課題も明らかになった。これを解決するために、本手引6頁の「H 子どもと教師の対話」にある「具体的な方策」において、対話を促す板書の構造化や教材の活用、抽象化⇔具体化の思考を促す切り返しや言い換えなどの具体的な実践を工夫する必要がある。

Ⅴ 第14期研究の計画

大会主題『子どもが変わる教育の推進』～主体的・対話的で深い学びに向かう授業の創造～		
	1年次（令和5年度）	2年次（令和6年度）
大会	第50回愛媛県教育研究大会（統一大会） R 5. 8. 8（火） エスポワール愛媛文教会館 大ホール	第51回愛媛県教育研究大会（発表大会） R 6. 11. 7（木） 宇和島市立明倫小学校・城南中学校
学校	・研究主題設定と推進計画 ・実践研究	・実践研究 ・研究成果のまとめ
支部	各学校の実践研究のとりまとめ→研究交流の一層の促進	
研究指定校	・県下2校（同じ管内）近隣校を指定 宇和島市立明倫小学校 宇和島市立城南中学校 ・第50回愛媛県教育研究大会（統一大会）において研究の推進計画の報告	・第51回愛媛県教育研究大会（発表大会） R 6. 11. 7（木） ・授業研究会において研究成果の発表 ・第14期の成果と課題の確認、第15期の方向付け
本部	・基調提案（教研局） ・統一大会企画・運営 ・研究集録作成 ・第15期以降の研究体制の検討	・授業研究会企画 ・大会の反省 ・研究集録作成 ・第15期研究計画（指定校決定等）

Ⅵ 本年度の研究推進の留意点

1 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業や評価の改善と1人1台端末の活用の充実

「主体的・対話的で深い学び」やカリキュラム・マネジメントの視点から授業や評価の改善を行い、目指す児童生徒像へと学びの質を高めていく。また、1人1台端末の効果的な活用を更に充実させ、教科の学びを深めていく。

愛教研では、昨年度より2年間（令和5年度～6年度）の第14期に、宇和島市立明倫小学校と城南中学校を研究指定校とし、主に「深い学び」に焦点を当てて実践的な研究を推進していく。研究指定校の両校はもとより各校・各支部においても、上表「第14期研究の計画」に基づいて、大会主題とサブテーマの実現を目指すこととする。その際、本手引の7頁に掲載している「深い学び」に係る「授業改善の視点・具体的な方策」のK～Oを中心に、各校の実態に応じてアレンジして活用し、その有効性や妥当性を検証する。

このような愛教研の研究により、各校や各支部の研修の充実を図るとともに、教員の資質・能力の向上に寄与していく。

2 研究交流の活性化

第12・13期の研究では、共に小・中学校間の連携を一層図ることが課題として挙げられた。小中連携は、時間軸で考えれば、子どもの成長には重要不可欠である。今後も、可能な限り同校種や異校種の学校間で研究推進に関する情報を共有し、学校相互の教育活動の更なる向上に努める。また、各支部においても、支部間の研究交流も促進し、支部相互の教育活動の更なる向上に努める。

3 教科等・専門研究委員会等の研究の推進並びに連携

教科等・専門研究委員会においては、これまで積み上げてきた財産ともいえる研究を継続しつつ改善を図るとともに、大会主題やサブテーマに迫るべく、研究推進計画の見直しを図り、実践研究に努める。その過程で、「深い学び」に係る「授業改善の視点・具体的な方策」を活用し、それらの有効性や妥当性について発信することが望まれる。

また、各校・各支部においては、教科等・専門研究委員会や関係機関と積極的に連携し、教科等の本質を踏まえた研究実践や研究交流を進める。

4 愛媛大学教育学部との連携強化

「愛媛大学教育学部と愛媛県教育研究協議会との連携に関する協定」の締結後、研究指定校、教科等・専門研究委員会には、専門性の高い愛媛大学教育学部の先生方がアドバイザーとして配属され、研究推進に大きな成果を上げている。このような愛媛大学教育学部との連携を更に強化し、研究の深化を図る。

5 研究推進の周知

研究推進の内容や方法を県内各校に積極的に発信し周知することは、愛教研の研究及び各校、各支部の研究の活性化を図る上で重要である。愛教研及び各校・各支部のホームページ、グループウェア等、ICTを有効に利活用したり、郡市教科等委員長・専門研究委員長会や統一大会の場で伝えたりして、周知徹底を図る。

6 第51回愛媛県教育研究大会（発表大会）の開催

第14期2年サイクルの2年次の研究行事として、令和6年11月7日（木）に、宇和島市立明倫小学校と城南中学校において、発表大会を開催する。本大会では、午前中は授業研究を通して研究指定校の研究の成果を確認する。午後は城南中学校にて研究指定校の発表やディスカッションにより、第14期の「深い学び」に関する研究の成果と課題を検証する。この内容が各校や各支部の研究推進に寄与するとともに、令和7年度以降の研究推進の指針となることを期待する。